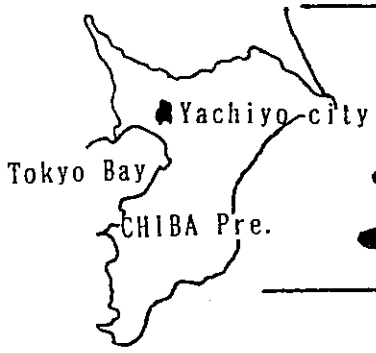


まい
埋やちよ

No. 2
千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
1998. 3. 31
（平成10年）

八千代市の埋蔵文化財 この1年

平成9年度の終了に当たって、この1年間を簡単に振り返ってみたいと思います。

【発掘調査】

縄文時代の遺跡としては、まず大和田新田の長兵衛野南（ちょうべえのみなみ）遺跡・上高野の新林（しんばやし）遺跡が特筆されます。共に遺構密度の低い地区にもかかわらず、縄文時代中期の住居跡を2軒ずつ発見しました。長兵衛野南遺跡については2ページをご覧ください。保品の上谷（かみや）遺跡では早期の焚き火跡であるファイヤーピットが多数見つかっています。

弥生時代では、上谷遺跡、神野の境堀（さかいほり）遺跡、萱田の菅地ノ台（すげちのだい）遺跡で後期の住居跡が見つかっています。

古墳時代のものとしては、菅地ノ台遺跡で古墳が見つかりました。墳丘は失われていますが、周溝（しゅうこう）が残っていたため古墳とわかりました。また八千代台北の内込（うちごめ）遺跡では古墳時代後期の住居跡が多数見つかりました。

奈良・平安時代では、上谷遺跡で多くの遺構・遺物が見つかっています。昨年度から継続的に調査しており、掘立柱建物跡や住居跡群が多数並んでいる様子が明らかになっています。この地域（村神郷－むらかみごう－）の中心的な集落だったのではないかと想像しています。上谷出土の「飾り金具」については4ページをご覧ください。

平安時代の遺跡としては、萱田町の池の台遺跡があり、住居跡2軒が確認されました。

このほかに戦国時代の吉橋城跡に関連すると思われる堀が見つかった吉橋の妙見前（みょうけんまえ）遺跡、江戸時代の馬の放牧場に伴う野馬堀（のまぼり）が見つかった高津新田遺跡も大きな成果でした。

【整理事業】

西八千代東部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書を作成・刊行しました。

【啓発事業】

わいわいＴＶの市政ロータリーで「古（いにしえ）のロマンを求めて」放映。

上谷遺跡で10月5日に遺跡見学会を行いました。 143名の皆様が参加、「ジョレンがけ」の体験や赤米試食などをしていただきました。

情報紙「埋やちよ」を創刊。インターネットでも公開しています。

教育委員会の新庁舎ロビーにささやかではありますが展示ケースを置いて遺物を展示しています。　（常松成人）

遺跡紹介　長兵衛野南遺跡

この遺跡は、大和田新田（おおわだしんでん）字（あざ）長兵衛野（ちょうべえの）の京成バラ園芸の敷地内で見つかりました。

調査前、現地の畑には土器の破片が散らばっていました。地下にあったものが耕作などによって、地表面に掘り出されていたのです。その土器は縄文時代中期前半～後期前半や、奈良・平安時代のものでした。こうしてここに遺跡があることがわかりました。

調査は平成9年4月から6月の間に2段階で行いました。第1段階は確認調査です。2m×5mの区画を調査範囲全体に平均的に設定して、その部分を掘っていきます。赤土（関東ローム層）の面まで掘り、その面に黒土や褐色土のシミがあるかどうか調べます。このシミは穴（遺構と言います）の埋まった跡を示すものです。私たちはそのシミの形や規模から遺構の大きさを推定し、「竪穴住居跡では？」「墓穴では？」と予想をつけます。長兵衛野南遺跡では縄文時代の竪穴住居跡と思われるシミが2ヵ所見つかりました。

第2段階は本調査です。このシミを実際に掘って遺構の正体をつきとめるのです。黒土や褐色土を取り除いていくと、2つの遺構とも似たような様子を見せてきました。やはり竪穴住居跡でした。

平面形はややいびつな円形です。底は平らな床面になっていて、その深さは現在の地表面から約70cmです。床のあちらこちらに小さな穴が見つかりました。中央付近の穴は窪み状で、その底は焼けて真っ赤です。これを炉跡と言います。調理の場、あるいは家族団欒の中心だったのでしょうか。ほかに柱の跡と思われる深い穴が並んでいます。また、貯蔵用と思われる浅い穴が、邪魔にならないような片隅に掘られています。木の実やきのこなど、自然の恵みや収穫物が保管されていたのでしょう。

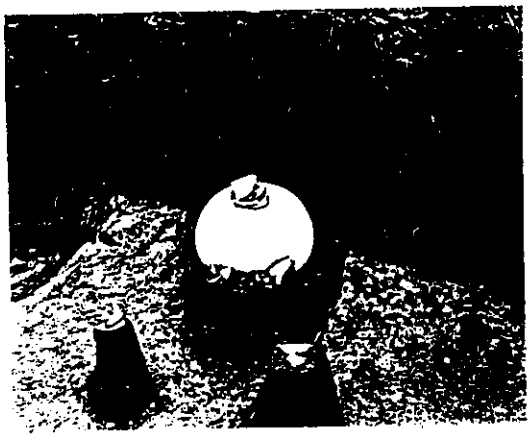
長兵衛野南遺跡の住居跡

今回の調査によって、長兵衛野の台地に縄文人の住居跡を見つけることができました。この住居の床の上で縄文人が確かに生きていたのです。何を考え、どんなことをしていたのか、疑問がつぎつぎと湧いてきます。時を飛び越えて姿を現した遺跡に、改めて深い感動を覚えた調査でした。　（森　竜哉）

遺物紹介　おおびた遺跡の底抜け壺

前号の遺跡紹介で、米本（よなもと）逆水（さかさみず）遺跡で発見された弥生時代中期の方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）を紹介しましたが、今回は平成８年９月から11月にかけて調査を行った、保品（ほしな）のおおびた遺跡をとりあげたいと思います。おおびた遺跡では逆水の方形周溝墓より少し新しい、弥生時代終末から古墳時代初頭の時期と思われる古墳が見つかったのです。

しかし最初におおびた遺跡に立った時は、ここに古墳があるとは思いませんでした。既に墳丘は無くなっていたからです。調査区の隅に長さ15mほどの黒いしみが現れ、調査区の外まで広がっていました。大型の住居跡かと予想して掘り進めていきましたが、床が出てきません。壁も住居のような形状ではありません。溝だと気づき、掘ること深さ約 1.5mでようやく底が出てきました。そして底のあたりからひと抱えもある大きな壺が現れたのです。



壺の出土状態

この壺は面白いことに、胴部は割れていないのに、底はすっぽりと平らに打ち割られていました。底無し壺あるいは底抜け壺とでも言いましょうか。

壺の底（手前が底）

考古学ではこのような土器のことを底部穿孔土器（ていぶせんこうどき）と呼びます。この土器は弥生時代～古墳時代のお墓から出土します。穿孔の方法にはおおびたの壺のように底があったのにわざと打ち割ったものと、最初から底無しで作られたものとがあります。

土器の底を抜くという行為が、埋葬儀式などと結びついていたのでしょうか。死者の魂が器の中に留まらずに底から抜け出てゆくことにより再生する、という思想を反映するのではないか、などと言われています。

こうしてこの溝は古墳のまわりを巡る周溝であると判断しました。また土器の形態から見て、古墳時代でも初期のものと考えられます。

遺構の大部分が調査区の外であるため古墳の形や大きさ、埋葬施設などについてはわかりません。将来ここを調査する機会があれば、より多くの貴重な資料が得られることと期待されます。

（宮沢　久史）

古代のベルトの飾りの話

保品の上谷（かみや）遺跡からは銅製の鉸具（かこ）２点・丸鞆（まるとも）３点・巡方（じゅんぽう）３点が出土しています。また石帯の巡方が２点出土しています。これらは下図に示したとおり古代の腰帯－ベルト－に付けられた飾りのことです。

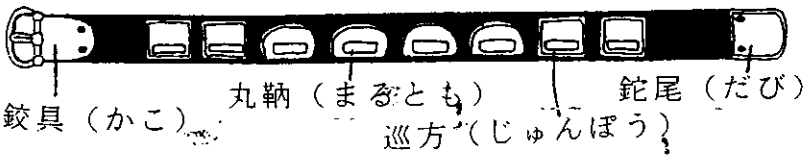
律令制度が確立した奈良時代（ 710年～ 794年）、当時の役人達には服装に関するきまりがありました。718 年に制定された『養老律令』（ようろうりつりょう）の中に規定されています。それによると役人はその身分の上下に合わせて定められた腰帯を身につけることになっていました。腰帯には鍔帯（かたい）あるいは帯金具（おびかなぐ）と呼ばれる飾りが付きます。石製の場合は石帯と言います。それが下図に示したとおりというわけです。

奈良東大寺の正倉院御物の中には、紺玉帯（こんぎょくたい）という黒漆塗の牛革製ベルトがあります。銀製の鉸具と紺玉（当時人気のあった深青色の美しい石）製の丸鞆・巡方・鉈尾（だび）で飾られています。美しさとともに権威をも示すものだったのでしょう。

上谷遺跡の帯金具は銅製なので、おそらく下級役人用の腰帯に付いていたものと考えられます。

古代の役人にとってステイタスシンボルであったベルトには、今では考えられないほど大きな意味があったことでしょう。たとえ下級役人用ベルトの帯金具であっても、これが出土したということは上谷遺跡が役人達と深い関わりを持っているということを暗示しているのだと考えられます。

（武藤健一・常松成人）



古代の役人の腰帯

編集後記

今年も多くの調査がありましたが、地味な発見がほとんどでした。しかし「継続は力なり」の精神で、地道な調査を続けています。地味な中にキラリと光る成果を見つけ出し、ご紹介していきたいと思います。

埋（まい）やちよ
－千葉県八千代市埋蔵文化財通信－
No. 2　　平成10年３月31日発行
編集・発行　八千代市教育委員会　生涯学習部
社会教育課　文化財係
八千代市大和田１３８－２
〒276-0045　☎0474(83)1151代表